

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書】

都道府県名	富山県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	大島町立大島小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	3	3	2	3	3	0	17	24
児童数	94	104	107	78	97	88	0	568	

研究の概要

1. 研究主題

自分で感じ、自分で考え、自分で解決する子供の育成を旨として

2. 研究内容と方法

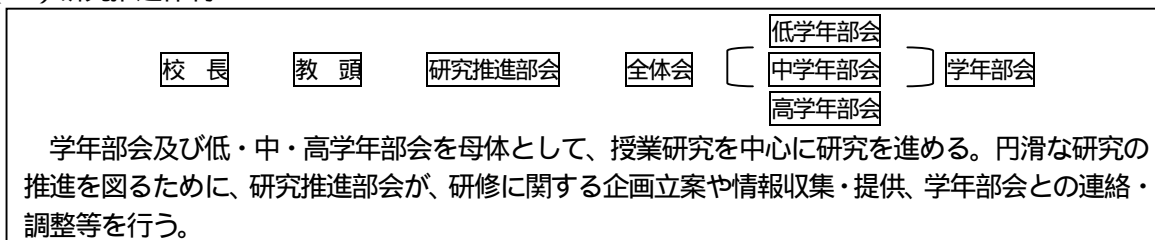
(1) 実施学年・教科

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 全学年・算数 「分かる・できる」実感がもちやすく、児童の理解の程度に差が出やすい教科であることから、全学年において実施する。特に、1学級あたりの児童数や理解に差が出やすい学習内容を扱う学年であること、2年間の継続研究であることなどを考慮して、第2学年～第5学年では、各学級を2集団に分け少人数指導（必要に応じてティームティーチング）を行う。</li> <li>・ 全学年・国語 平成12年度から「総合的な学習の時間」の開発に取り組み、豊かな感性・行動力・表現力・コミュニケーション能力の伸長に努めている。これまでの研究の歩みから、これらの力は国語科の「話す・聞く・読む・書く」力と大きくかかわることが分かってきた。特に、全ての基礎・基本になると考えられる「読む・書く」力の育成を旨として、全学年で取り組む。</li> </ul>
---

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ 分かる喜び・できる喜びを味わう学習</p> <p>研究の見通し（仮説）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 一人一人のよさが発揮できる教材を工夫すれば、考える楽しさやできる喜びを味わいながら主体的に学習を進めることができる。</li> <li>* 指導目標を明確にし、指導方法・指導体制を工夫すれば、基礎的・基本的な学習内容を確実に身に付けることができる。</li> </ul> <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 教材の開発や単元構想の工夫</li> <li>* 指導方法・指導体制の工夫</li> <li>* 基礎的・基本的な学習内容の定着</li> </ul> <p>研究内容等を研究推進部会で企画立案した後、全教職員の共通理解を図り、研修計画に基づいて日常的・継続的に研修を進める。定期的に公開授業研究を実施し、子供の学びの姿を通して仮説を検証し主題解明に当たる。</p> <p>テーマ かかわり合い、互いに高め合う学習</p>
平成16年度	<p>研究の見通し</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 子供相互のかかわりの場を重視し、互いに高め合う学習を工夫すれば、考えを広めたり深めたり、学ぶ喜びを感じたりして、学習への意欲を高めることができる。</li> <li>* 一人一人に付けたい力を明確にし、指導方法や評価方法を工夫すれば、基礎的・基本的な学習内容の定着を図ることができる。</li> </ul> <p>研究の内容・方法（研究方法については、平成15年度に準ずる。）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 子供相互のかかわりの場、高め合いの場の工夫と効果的な支援</li> <li>* 一人一人の実態や到達度を把握し、指導に生かす評価の工夫</li> </ul>

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究の成果

**「分かった」「できた」喜びを積み重ねていく指導過程の重視**

5年生の算数科「いろいろな面積」では、平行四辺形や三角形等の面積の求め方を自分で見つけ出すことを通して、問題を解く楽しさや分かる喜びを味わわせたいと考えた。そこで、1時間の指導過程を基本的に、課題把握 自力解決 話し合い(練り上げ) 追体験という流れで毎回同じように展開した。このような指導過程を重視したことで、子供たちは学習の見通しをもち、これまでの学びを生かしながら課題解決にあたり、自ら「分かった」「できた」喜びを味わうことができ、主体的な学びや学習の定着につながっていった。

<平成13年度教育課程実施状況調査より図形の面積の求め方に関する問題を抜粋して実施(％は正解率)>

	1組	2組	3組	H13年度 報告書より	前回
三角形の求積	92.2%	96.8 %	92.2 %	73.5% (公立学校)	84.8%
平行四辺形の求積	90.6%	90.3 %	96.9 %	89.8% (公立学校)	90.4%

<「いろいろな面積」学習後のアンケート> (32人対象)

区 分	はい	いいえ	無答
学習がよく分かったか	90.2%	0%	9.4%
好きだったか	87.5%	3.1%	9.4%
役立つと思ったか	53.1%	0%	46.9%

4年生の国語科「体の仕組みについて分かりやすくまとめよう」では、教材文のよさを十分に味わい、分かりやすい自分なりの表現方法で書くことができるようになってほしいと考え、教材文を読む 例文をみんなで作る 自分だけの文章を書くというふうに、段階を踏んだ指導過程を取り入れた。子供たちは、教材文を何度も読み、話し合いを通して、まず教材文の分かりやすさの秘密に気づいていった。次に、例文を作ることで、自分たちで見つけた秘密の確かさを実感した。さらに、単元の後半、子供たちはそれぞれの課題について自力で書き進め、互いに見直ししながら、何回も書き直すことによって、より分かりやすい文章に仕上げることができた。単元終了後の感想には、多くの子供たちが書くことに抵抗がなく楽しくなったと書いていた。

**ねらいや期待する子供の姿に応じた柔軟な指導体制**

どのような指導体制で学習を進めるかは、単元の内容や1時間1時間の目標、子供に付けたい力に応じて柔軟に組み立てていくことがよいと分かった。

2年生の「かけ算」では、九九の構成をするときはTTによる一斉指導、九九の習熟を図るときは等質の少人数指導、そして、かけ算の後半ではこれまでに付けた力を基に課題別少人数指導というように、一つの単元の中で身に付けさせたい力に応じた指導体制を工夫した。

5年生の「いろいろな面積」では、多様な面積の求め方に触れさせたいと考え、TTによる一斉指導を基本として学習を進めることとした。しかし、1時間の授業の中でも、学級を2グループに分け、学級内少人数指導を実施するなど、そのときの子供の反応や定着状況に応じた指導体制を取り入れた。その結果、一人一人の習熟の程度に応じてタイミングよく指導することができた。

複数の教師で授業を行う場合、教材観や児童観を十分に話し合い、共通理解を図ることが大切であり、課題別少人数指導でも習熟度別少人数指導でも、TTによる一斉指導でもかなり成果は上がる。

習熟度別に分けることについては、子供に劣等感や差別感を抱かせないように配慮しつつ、子供自身

の「よく分かるようになりたい。」「できるようになりたい。」という思いを大事にして、コースを自分で選ばせる余地を残すことによって、子供たちは意欲的に学習に取り組んだ。子供たちがどのコースを選んだとしても、そこで「分かった」「できた」喜びを味わうことができるように、可能な限りアイデアを出し合い、指導体制を柔軟に作り上げていく姿勢が大切である。

### 基礎・基本の定着につながる誤答分析・ノート指導

2年生の「かけ算」の学習では、前半の5・2・3・4の段で、主にかけ算の意味や構成についての誤答を、後半の6・7・8・9の段では、九九の定着についての誤答を記録し、累積するようにしていた。特に、後半では、子供の持っている学習カードにも記録し、子供と共に誤答を大切に、確実に九九が定着するようにした。このように、毎時間の授業のねらいを明確にし、それについての考えや誤答をノートや授業の様子から記録し、一人一人のつまずきや学級の誤答の傾向をつかんだ。そして、次の学習でおさえ直すようにした結果、つまずきを減らすことができた。また、ねらいが達成されているかどうかを見るために学習の節目に、誤答も踏まえたミニプリントを作って活用した。定着度を確認するとともに、適時つまずきに応じた指導をしたことが、基礎・基本の定着につながったと考える。

<小単元終了後実施した業者テストの結果>

<全単元終了後実施した九九確認テスト(81ますかけ算)の結果>

かけ算1	平均点97点	ばらばら九九	選択者24名	正答率98%	平均時間3分31秒
かけ算2	88点	逆さ九九	12名	99%	3分24秒

算数科においては、低中高学年別に「ノートの書き方プリント」を作成し、自分のノート作りを意識させた。発達段階に応じてポイントを絞って繰り返し指導したことで、自分の考えを図や絵を使って分かりやすくかくことができるようになったり、「書いて考える」学習習慣が徐々に定着したりしてきた。自分のノートが整理され、見やすくなったので、前の学習を振り返り、考えの参考にするようになった。特に、考えの道筋や間違いを消さないことの徹底は、子供自身が友達の考えと比べたり、どこで間違えたのかを自分で気づいたりするようになったことに結びついた。

## 2. 今後の課題

- ・ 主体的な学びは、学級集団内の友達とのかかわりで生まれ、子供は友達から認められたり教え合ったりする中で、問題解決への見通しや自信、手がかりを得、学ぶ楽しさを感じ取る。自分の考えをもつ場でのかかわり、それぞれの考えを出し、みんなで考えを練り上げていく場でのかかわり、よさを認め合う場でのかかわりなど、主体的な学びに結びつくようなかかわりの在り方を探っていきたい。
- ・ 学力の評価をどうとらえていけばいいのか。また、それをどう次へ生かすのかということで、診断的評価・形成的評価・総括的評価などを取り入れながら実践を試みてきた。評価規準の見直し、チェックリストの活用、少人数指導における子供の学びのとらえ方など指導に生きる評価や子供の学習意欲を高める評価の在り方について、さらに追究していきたい。

学力等把握のための学校としての取組

### 小教研学力調査

4月に県小学校教育研究会による学力調査を実施した後、各教科の評価の観点別に、特に国語では言葉に関する力をみる小問を、算数においては、それぞれの観点での問題をピックアップして正答率や無答率を出し、誤りがちな内容を把握したり子供たちに不足している力をとらえたりした。そして、学級や学年の傾向や実態を洗い出し、どのような指導を重点的に行っていくかなど指導の方針を打ち出し、指導法の改善を試みている。

### 学習アンケート

5月と1月に全学年を対象に「学習アンケート」を実施し、算数への興味・関心や学習習慣などの傾向をとらえ、指導に生かすとともに、変容を見ていくこととしている。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- ・ 11月26日、管内のフロンティア校に案内し、要請訪問研修会を開催した。低中高三つの公開授業を通して、フロンティア校としての実践の一端を紹介した。
- ・ 初年度の研究の概要を研究紀要にまとめ、郡内の各学校及び県内のフロンティア校に配布する予定である。

【新規校・継続校】	15年度からの新規校	
【学校規模】	13～18学級	
【指導体制】	少人数指導	T・Tによる指導
【研究教科】	国語	算数
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		有